

つくり  
育てる漁業  
人と技術の  
ネットワーク

# ACN REPORT

特定  
非営利  
活動法人

ACNレポート  
第62号

2025年1月31日発行  
(毎年2回1月・9月発行)

編集/NPO法人ACN事務局  
発行人/田嶋猛(NPO法人ACN代表)  
発行所/NPO法人アクアカルチャーネットワーク  
〒833-0056 福岡県筑後市久高1343番地  
ACN事務局/クロレラ工業株式会社  
営業本部技術特販部内  
TEL.0942-52-1261  
FAX.0942-51-7203

NO.62 2025. JAN.  
AQUACULTURE NETWORK

## 1. 第34回ACNフォーラム開催

NPO法人 ACN

## 2. ACN養殖用種苗生産中間速報

NPO法人 ACN

## 3. ACN養殖・販売概況

NPO法人 ACN

## 4. 「アクアポニックス・陸上養殖設備展」に出展して

太平洋貿易株式会社 第一営業部 係長 奥出 英明

## 5. 「第8回“日本の食品”輸出EXPO SUMMER」に参加して

太平洋貿易株式会社 第二営業部 係長 北澤 里沙

## 2025年頭のご挨拶



NPO法人ACN(アクアカルチャーネットワーク)理事長 田嶋 猛



2025年を迎え、年頭のご挨拶を申し上げます。

読者の皆様には平素よりNPO法人ACNの活動にご理解とご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。昨年は新たに3社が入会され正会員20社、賛助会員3社になりました。

巳年の2025年が、皆様にとりまして実り多き年になりますよう祈念いたします。本年もどうぞ宜しくお願いいたします。

## 謹 賀 新 年

### 正 会 員

- 岩波 啓明
- 金子産業(株)
- 神畑養魚(株)
- 九州・水生生物研究所
- クロレラ工業(株)
- コフロック(株)
- (株)三共物商
- (株)SEIEI
- 太平洋貿易(株)
- (株)田中三次郎商店
- 東亜薬品工業(株)
- 日清丸紅飼料(株)
- 日本農産工業(株)
- 林兼産業(株)
- (株)ヒガシマル
- フィード・ワン(株)
- (有)松阪製作所
- 室越 章
- ヤンマーホールディングス(株)
- (株)ユーエスシー

### 賛助会員

- ウインテック(株)
  - (株)サン・ダイコー
  - 日本エア・リキード合同会社
- ※会員名五十音順

## ●海面養殖業 魚種別収獲量

単位：トン

年次	ギンザケ	ブリ類	マアジ	シマアジ	マダイ	ヒラメ	フグ類	クロマグロ	その他	合計
H26(2014)	12,802	134,608	836	3,186	61,702	2,607	4,902	14,713	2,607	237,964
H27(2015)	13,937	140,292	811	3,352	63,605	2,545	4,012	14,825	2,709	246,089
H28(2016)	13,208	140,868	740	3,941	66,965	2,309	3,491	13,413	2,659	247,593
H29(2017)	15,648	138,999	810	4,435	62,850	2,250	3,924	15,858	2,859	247,633
H30(2018)	18,053	138,229	848	4,763	60,736	2,186	4,166	17,641	2,868	249,491
R01(2019)	15,938	136,367	839	4,409	62,301	2,006	3,824	19,584	2,869	248,137
R02(2020)	17,333	137,511	595	4,042	65,973	1,790	3,393	18,167	3,117	252,352
R03(2021)	18,482	133,691	586	3,836	69,441	1,711	2,833	21,476	4,143	256,199
R04(2022)	20,200	113,900	500	4,500	68,100	1,800	2,800	20,500	5,000	237,300
R05(2023)	22,100	123,000	600	4,700	68,000	1,700	2,800	16,200	4,600	243,700

資料：農林水産省 海面養殖業魚種別収獲量

# 第34回 ACNフォーラム

2024年10月24日(木)

アークホテルロイヤル福岡天神にて開催

2024年10月24日に第34回 ACN フォーラム(日本の増養殖を考える会)を福岡市のアークロイヤルホテル福岡天神にてハイブリッド方式で開催しました。参加者はオンラインが約150名、会場のオンサイトが79名でした。講演会後に開催された情報交換会では久々の再会を楽しむ参加者などで和やかな雰囲気になりました。

講演会の司会進行役はACN会員の彦田氏が勤め、開会挨拶の田嶋理事長に続き、共同開催者として、科学技術振興機構(JST)の事業である共創の場形成支援プログラム(COINEXT)地域共創分野(本格型)に採択された「ながさきBLUEエコノミー」のプロジェクトリーダー征矢野清・長崎大学教授から、今後想定される養殖業の厳しい状況を、生産者・技術者・研究者が知恵を絞って乗り切るための新たな技術を生み出す場として、ACNフォーラムは重要な役割を担っていると挨拶して頂きました。

続いて来賓の「月刊アクアネット」発行編集人 池田成己様は挨拶の中で、「養殖事業は“利益のたまり場”？」と題して魚粉・魚油など原材料価格の高騰や高水温による生産性の著しい低下などにより、魚類養殖や種苗生産のいわゆる川上の事業者が厳しい経営環境にあるが、その一方で集荷・販売の川中・川下の事業者の川上事業への参入が増えている感がある。プロフィットプール(利益のたまり場)は構造的に変化しつつあるのではと言及されました。

続く講演では、共立製薬株式会社ワクチン事業本部ワクチン開発部 水産ワクチン課課長 福田耕平様から「養殖魚類用ワクチンの現状と未来」と題して、国内魚類ワクチンの歴史・課題、海外魚類ワクチンの現状や最新の知見も披露され、最後に国内の魚類ワクチンの将来性として、制度面での課題克服と、新技術導入によるワクチンおよび周辺ツールの開発・普及の両輪が必要であるとの講演を頂きました。

その後、休憩を挟んで、(株)SINRA代表取締役(愛媛大学大学院農学研究科客員教授)高橋隆行様から「中国養殖業界の現状と今後の展望」と題して、世界の漁業・養殖生産量、水産物需要及び中国の海水・淡水魚養殖の現状を巨大な海面生簀や養殖専用船などの写真や動画を交えて講演して頂きました。最後に日本には優秀な養殖技術者がまだまだ現役世代なので水産技術大国ニッポン復活のため世界に視野を広げ、活躍の場を創って頂きたいとのエールが送られました。

講演後の質疑応答では、講演2題に対する事前及び当日に寄せられた質問に対し、講師の先生方から回答して頂きました。

最後に、長崎大学水産学部の萩原篤志名誉教授(ACN顧問)から講師の先生及び参加者へのお礼の言葉を頂き閉会となりました。



第34回ACNフォーラム講演会場



開会挨拶：長崎大学 征矢野教授



来賓：アクアネット誌 池田氏



講演：共立製薬(株) 福田課長



講演：(株)SINRA 高橋社長



ACN顧問 長崎大学 萩原名誉教授

# ACN養殖用種苗生産中間速報

2024年9月～12月出荷尾数  
2025年1月～予想

## 1. マダイ

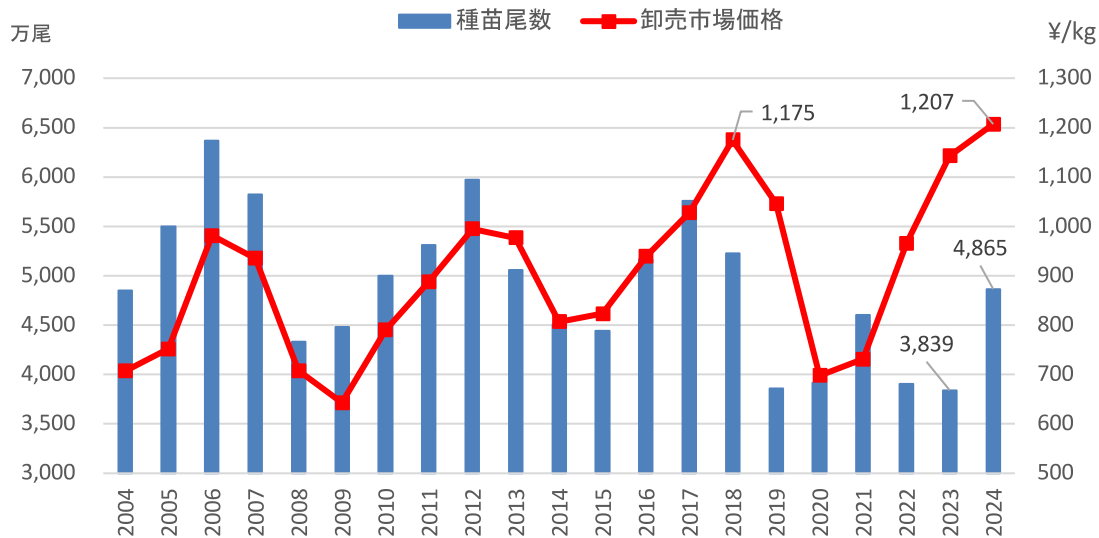
2024年9～12月に出荷された夏越し種苗は405万尾で、前年の460万尾と比較し12%の減少となった。また、秋以降に仕込まれた秋仔種苗の販売予定数は、**山崎技研、近畿大学、ヨンキュウ、バイオ愛媛**などの13社（民間11社、公的2事業場）で2,805万尾となり、前年の2,710万尾と比較し4%の増加となっている。2025年1月以降に仕込み予定の春仔種苗の販売予定数量は2,060万尾が見込まれており、今シーズン（2024年9月～2025年8月）の種苗販売尾数は、生産が順調に進めば、前年（3,839万尾）より増加して4,865万尾（図1）になると推測される。

2023年は、韓国輸出向けの1.5kgアップの大サイズ

を中心に在池が少なかったことから、マダイ成魚価格も堅調に推移した。図1に示すように、東京都中央卸売市場の2024年1～11月の平均価格は1,207円/kgと2018年の高値を更新しており、特に2024年8月以降は1,220円/kgを超えて推移しており、価格の堅調さが見てとれる（5ページ養殖・販売概況 図1参照）。

成魚価格の堅調さに反して生産コスト増大や高水温・疾病による歩留まり低下がマダイ養殖業者の収益を圧迫しており、浜相場1,100円/kg以上でないと採算が取れないとの声も聞かれた（2024年12月現在の浜値は930円/kg前後）。

図1 マダイ養殖用種苗尾数と成魚価格の推移



資料：成魚価格 東京都中央卸売市場統計情報 鮮魚/たい類/まだい（養殖）  
但し 2024年は1～11月までの平均価格  
種苗尾数 ACNレポート種苗生産速報（記載年9月から翌年8月までの1年間の合計）  
但し、2024年は見込み数

## 2. トラフグ

2024年9月～12月の養殖用の種苗は**アーマリン近大**など民間3社で23万尾生産され18万尾が出荷された模様である。その他の生産者は例年通り年明けの1月上旬から2月にかけて1回目の採卵を予定している。

ここ数年は熊本県八代海や長崎県橘湾での赤潮被害

の発生、やせ病などの魚病被害による歩留低下が報告されているが、現時点で今季の池入れ尾数を大きく変更する動きは聞かれず、養殖用種苗の数は前年並みの530万尾前後と推測される。

### 3. ヒラメ

2024年9月～12月のヒラメ種苗出荷数は、まる阿水産、マリンテック、長崎種苗など民間6社（公的機関なし）で前年比12%増の155万尾となった。2025年1月以降の尾数を前年並みの172万尾と仮定すると、今シーズン（2024年9月～2025年8月）の養殖用種苗数は本紙記載で最低尾数となった昨シーズンを17万尾上回る327万尾と予想される。しかし一方で、養殖生産者のヒラメ稚魚入れ尾数の増加が見込めないことから、他魚種種苗へ魚種転換や従業員の休暇待遇改善を目的にヒラメ種苗の生産尾数を減らす動きも聞かれ、最終的な養殖用ヒラメ種苗尾数は不透明である。

種苗生産は概ね順調に推移したようであるが、一部ではアクアレオウイルス感染症が原因とされる不調も聞かれた。

### 4. シマアジ

2025年のシマアジ種苗出荷予定数は、アーマリン近大、山崎技研など6社（民間5社、公的1事業場）で前年（448万尾）より微増の約470万尾とみられる。

成魚相場は高値安定しているものの、前年同様にレンサ球菌症などの魚病が頻発し、歩留の悪化で養殖生産者の種苗導入意欲の向上は見られない。前年並みの導入尾数を確保する生産者が多い模様ではあるが、一

近年の高水温による制限給餌で成長が遅れて、成魚の出荷時期がずれ込み、種苗導入の時期を年々遅らせる養殖生産者が増えている。種苗生産者にとっては長期間飼育に伴う経費増加が負担となっており、養殖生産サイクルの正常化が求められる状況である。

ヒラメ養殖の現状打破のために通常の選抜育種だけでなく、一部の種苗生産者や研究機関では抗病性や高水温耐性などを備えた種苗を得るための研究開発、早期市販化に既に取り組んでおり、今後の成果が期待される場所である。

種苗の販売価格は、生産コスト上昇に伴い8cmUPで90～110円/尾で、前年比10円の値上げを行った業者もある。

部では、尾数の減少やマダイに変更する生産者もみられる。

全体としてシマアジの種苗生産についてはこれまでと概ね変わらない傾向であるが、養殖生産者の稚魚導入意欲は若干の鈍化傾向となっていると思われる。早急に魚病対策の確立が望まれる場所である。

### 5. ブリ

2024年8～12月のブリ人工種苗出荷数は、黒瀬水産、山崎技研、マルハニチロ養殖技術開発センター、アーマリン近大など10社（民間8社・公的2事業場）で、前年（360万尾）比7.7%増の388万尾であった。種苗価格はサイズによって様々ではあるが、水産研究・教育機構HPの2024年1月18日の競争入札結果は120～141円/尾であった。

2025年1月からは試験用に種苗生産する公的2機関を含め7社が生産開始予定である。

成魚の浜相場は、鹿児島県主要産地筋では「長かつ

た浜値低迷から脱しつつある。前年の同時期より確実に引きが強い（みなと新聞2024年11月25日）」との報道もあるように、2024年初の850～900円/kgから年末には900～1,050円/kgと回復傾向である。

種苗生産の状況は、天然のモジャコとの競合を避けるために、8月下旬からの早期生産や設備面を見直して体制を整える業者も増加してきている。

以上

注) 文中の種苗価格・成魚浜相場は消費税抜き

東京都中央卸売市場の平均価格・取扱金額は消費税込み

(文中社名等敬称略)

# 養殖・販売概況

2025年1月 ACN

## 1. マダイ

2024年の養殖マダイの成魚浜相場（生産者価格）は、対韓輸出や在池薄を背景に960円/kgと高値での出だしとなり、2024年6月頃まで960円/kgで推移した。その後は消費の弱さにより30円/kg下落したが、現在まで930円/kgで安定して推移している。高値から消費は弱く、保合い相場が予想される。

2024年の韓国向け輸出は1月から3月までは低調であったが、6月以降は全ての月で前年対比110%超の輸出量となっており、引き合いの強さが見てとれる。

マダイ生産者の中には、飼料効率向上のために生け簀1枠当たりの収容尾数を減らしたり、例年よりも給餌量を減らしたりする事例が見受けられた。

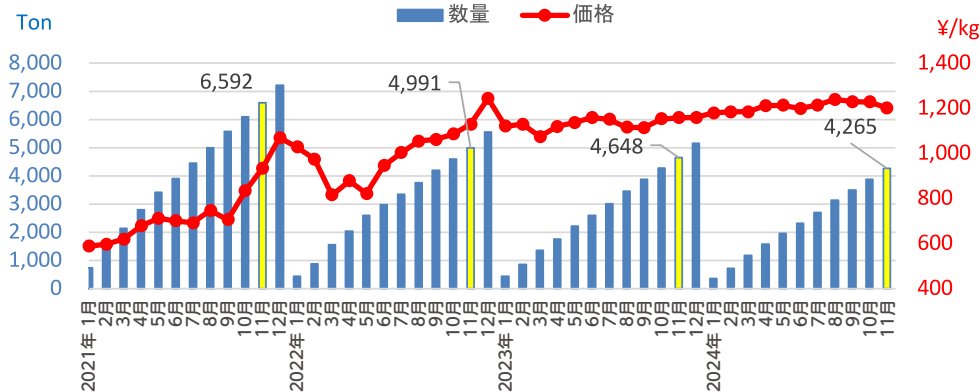
図1は、2021年以降の東京都中央卸売市場における養

殖マダイ（鮮魚）の累計取扱量と月別価格を示したものである。2024年1～11月の取扱量は前年比8.3%減の4,265トンを、平均価格は7.0%高の1,207円/kgであった。

成魚価格の堅調さに反して生産コスト増大や高水温・疾病による歩留まり低下がマダイ養殖業者の収益を圧迫しており、浜相場1,100円/kg以上でないといと採算が取れないとの声も聞かれた（2024年12月現在の浜相場は930円/kg前後）。

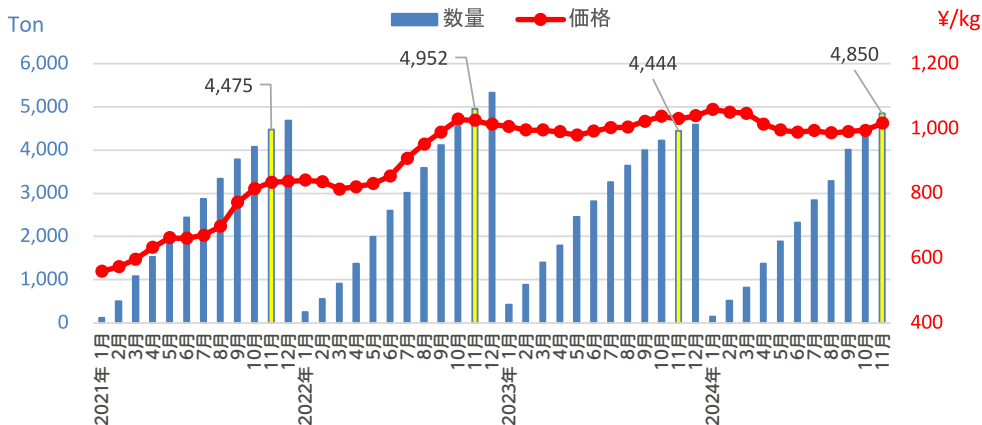
図2は、2021年以降の韓国向けマダイ活魚の累計輸出数量と月別FOB価格を示したものである。2024年1～11月の輸出数量は、前年同期比9.1%増の4,850トンを、輸出金額は、9.6%増の4,876百万円、平均FOB価格は0.6%高の1,005円/kgであった。

図1 東京中央卸売市場 養殖マダイ(鮮魚)取扱数量と価格



資料：東京都中央卸売市場(全场) 鮮魚/たい類/まだい(養殖)  
(図中の数字は毎年 1～11月の累計取扱数量を記載)

図2 韓国向けマダイ(活魚)輸出数量と価格



資料：財務省 貿易統計 (価格はFOB、図中の数字は毎年 1～11月の累計輸出数量を記載)

## 2. トラフグ

2024年10月からのトラフグシーズンは昨季より200円程度安い2,800円/kg前後の浜相場でスタートした。産地での赤潮被害や高水温による成長遅れなど不安要素があったものの、12月に入るまで暖かい気候が続き鍋商材の売れ行きが鈍かったこと、昨年に続き値ごろ感のあったカニに消費が流れたことなどにより供給不足に陥ることはなかった。浜相場は2,500~2,600円/kg程度で推移し、年末にかけて2,600~2,900円/kgとなった。

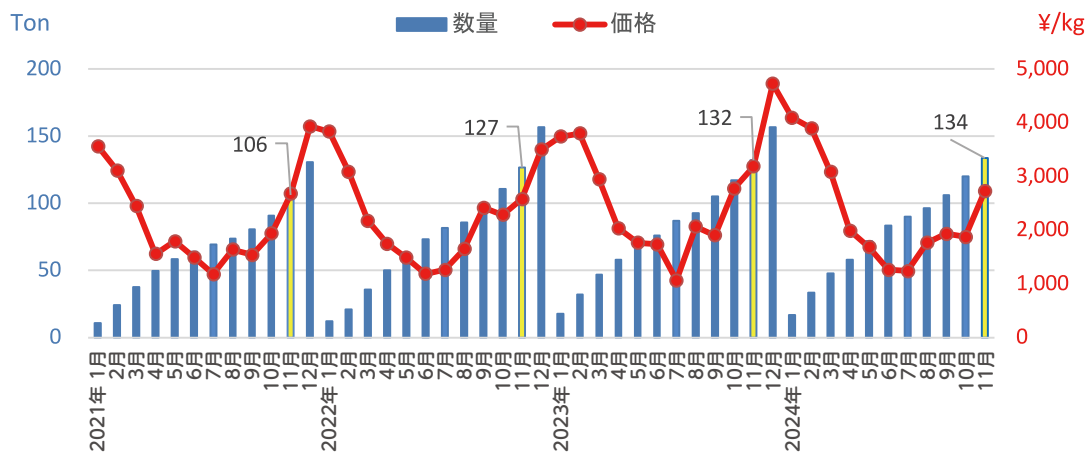
天然物は9月26日に下関市の南風泊市場で初競りが行われ、入荷量は前年比170kg増の250kg、価格は大サイズが前年比1,000~3,000円/kg安の13,000~19,000円/kgと

なった。

2024年1~12月の南風泊市場のトラフグ活魚取扱量と価格は天然79.1ト、5,288円/kg（前年71.9ト、5,301円/kg）、養殖981.3ト、2,712円/kg（前年910.2ト、2,766円/kg）であった。（みなと新聞統計データ）

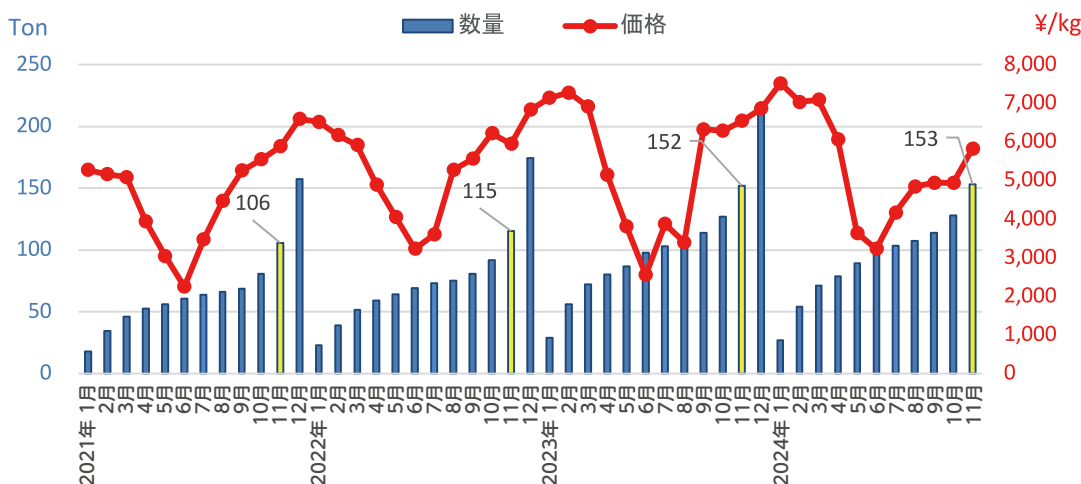
図3、4は、東京都中央卸売市場における2021年以降のトラフグ鮮魚と身欠きの累計取扱数量と月別価格の推移を示したものである。2024年1~11月の鮮魚取扱数量は前年比1.5%増の134トで、身欠きフグは0.6増の153トであった。同期間の平均価格は、鮮魚は前年比3.3%高の2,713円/kgと、身欠きは前年比1.5%安の5,995円/kgであった。

図3 東京都中央卸売市場 トラフグ(鮮魚)取扱数量と価格



資料:東京都中央卸売市場(全场) / 鮮魚/ふぐ類/とらふぐ (天然と養殖の区別なし)  
(図中の数字は毎年1~11月の累計取扱数量を記載)

図4 東京都中央卸売市場 トラフグ(身欠き)取扱数量と価格



資料:東京都中央卸売市場(全场) / 鮮魚/ふぐ類/みがきふぐ  
(図中の数字は毎年1~11月の累計取扱量を記載)

## 3. ヒラメ

2024年8~11月の東京都中央卸売市場のヒラメ活魚取扱数量は、前年比20ト減の205ト、平均価格は前年比186

円/kg高の3,184円/kgであった。また、韓国産活ヒラメの8~11月の輸入量は前年比30.5ト減の573トで、平均価格は

226円/kg高の2,144円/kgと国産、韓国産何れも数量が落ちて平均価格は高値で推移している。11月以降は天然ヒラメも水揚げされることから東京都中央卸売市場での取扱数量は伸びてくると推測されるが、少なからず相場高が養殖ヒラメの消費に影響していることが示唆される。一方で、夏場の高水温対策として制限給餌がされたため魚体が小さく、市場が要望するサイズが供給できないことも取扱数量減の要因となっている。

魚病関連では、エドワジエラ症が全国的に歩留まり低下の主要因となっている。さらにレンサ球菌症、スクーチカ症による被害も多く聞かれヒラメ養殖生産者にとっては歩留り改善が一番の課題である。

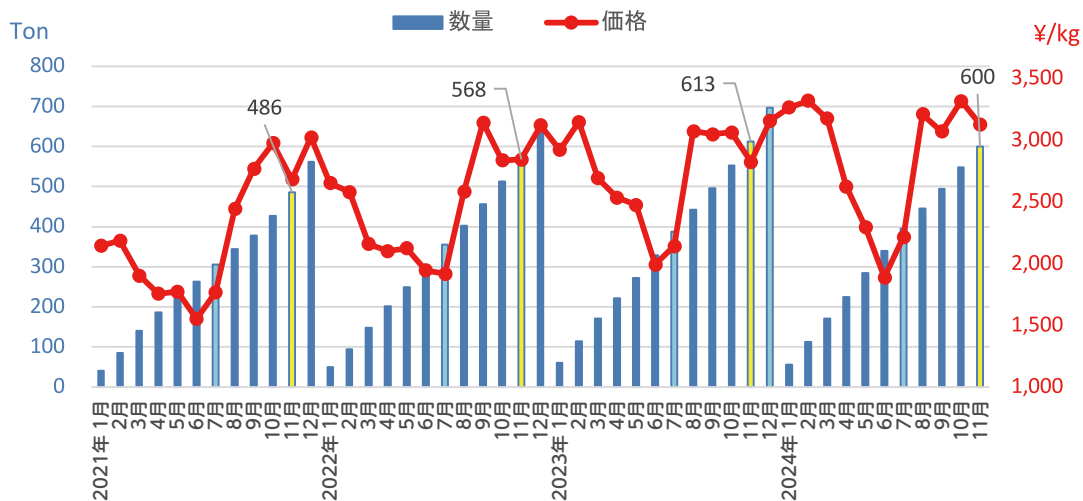
ヒラメ養殖だけに限った話ではないが、各養殖現場では、生産性の向上や歩留まり改善へ向けて養殖方法の工夫や環境の改善に日々尽力されており頭が下がる思いである。しかし、防疫という観点から見ると他業種と比較して甘

い部分が多く、改善の余地はまだ多くあるように思われる。まずは、水平感染を防ぐために作業カッパや胴長靴などの消毒や用具は水槽毎に使い分ける対策に加えて、病原体の持ち込みを防ぐために担当者以外の出入りを制限するといった基本事項を今まで以上に徹底していくことが感染を減らし、歩留まり改善への第一歩になると考えられる。

図5は、2021年以降の東京都中央卸売市場におけるヒラメ(活魚)の累計取扱量と月別価格を示したものである。2024年1~11月の取扱量は前年比2.2%減の600<sup>t</sup>で、平均価格は5.0%高の2,856円/kgであった。

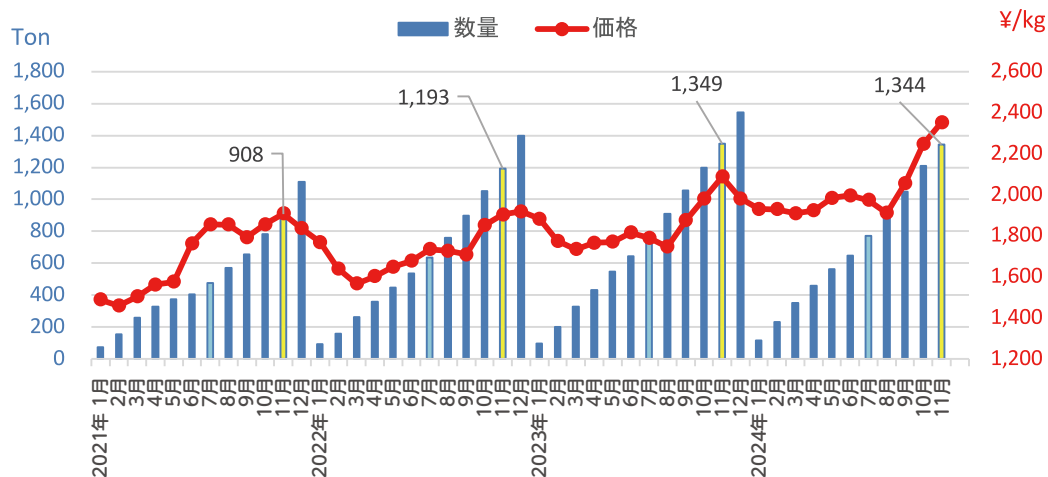
図6は、2021年以降の韓国産ヒラメ活魚について、累計輸入量と毎月のCIF価格を示したものである。2024年1~11月の取扱量は前年比0.4%減1,344<sup>t</sup>で、平均価格は前年比10.1%高の2,032円/kgであった。

図5 東京都中央卸売市場 ヒラメ(活魚)取扱数量と価格



資料：東京都中央卸売市場月報 活魚類/活ひらめ/天然養殖の区分なし  
(図中の数字は毎年1~11月の累計取扱数量を記載)

図6 韓国産ヒラメ(活魚)輸入数量と価格



資料：財務省 貿易統計 魚(生きているものに限る)/ひらめ  
(価格はCIF、図中の数字は毎年1~11月の累計輸入数量を記載)

## 4. ブリ・ハマチ

2024年1月の鹿児島県のブリ浜相場は850～900円/kgであった。高知県の新物が例年より1ヶ月ほど遅れ、4～5月から出荷開始し、相場は900～930円/kgであった。鹿児島県の5月の新物は950円/kgで販売が開始されたが、販売は低調であった。年明け以降も在池が潤沢であったこともあり、浜相場は下落傾向であり、8月時点では880～900円/kgで取引された。一方で9月以降は在池減少により相場が反転し上昇基調となった。例年に比べ成長が遅れが出ていたことも相場に影響している。成長遅れの要因は、高水温下における魚病発症を警戒しての給餌制限に加えて、魚体の増重よりも生存するためのエネルギー消費の増加であるが、生餌を含む飼料費用の負担増加により夏場の給餌量を抑える動きもみられた。相場上昇は、3kg台での出荷が多かったことや魚病による斃死増加で在池量が減少したことが推測される。その後も上昇傾向は続き、12月時点で浜相場は900～1,050円/kgとなっていた。年末の出荷は強い引き合いがあったが、年明けの出荷分を確保するために出荷を抑える動きもあった。

疾病関係では、当歳魚、2年魚でノカルジア症が発症しており、特に2年魚の被害が大きい。その他、2年魚にて側

彎症の発生が例年に比べ多い状況である。

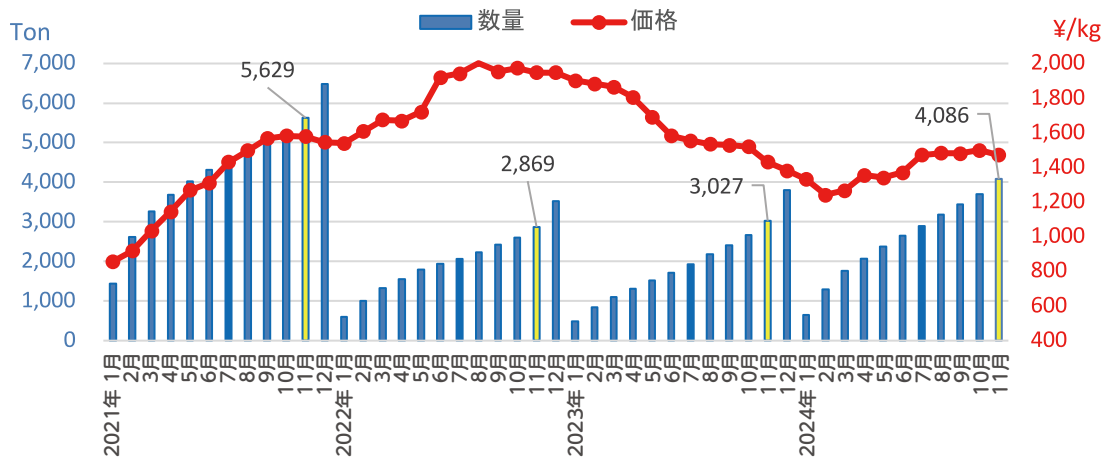
ブリを含む青物の赤潮被害については、2024年夏に八代海（熊本・鹿児島）、橘湾（長崎）、伊万里湾（長崎）に続いて大分県、宮崎県でも発生したが、9月以降の被害はなかった模様である。

図7は、2021年以降の東京都中央卸売市場における養殖ハマチ（鮮魚）の累計取扱数量と月別価格を示したものである。2024年1～11月の取扱量は前年比34.9%増の4,086トで、平均価格は18.8%安の1,367円/kgであった。

図8、9は、2021年以降の冷凍及び生鮮・冷蔵ブリフィレの累計輸出数量と月別FOB価格を示したものである。2024年1～11月の冷凍フィレの輸出量は前年比6.7%増の10,445トで、価格は20.2%と大幅下落の2,130円/kgであった。生鮮・冷蔵フィレは前期比5.3%増の1,484トで平均価格は5.8%安の2,303円/kgであった。

米国の冷凍ブリフィレ在庫は、2024年の年初には潤沢であったが、年末には調整は進んでいるとの情報があり、2025年の輸出価格の上昇が期待される所である。

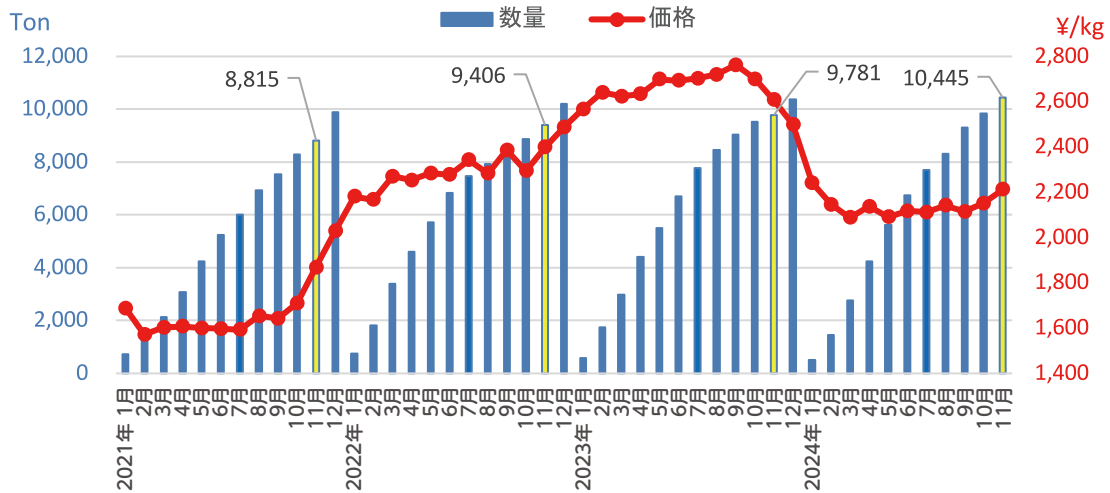
図7 東京都中央卸売市場 養殖ハマチ(鮮魚) 取扱数量と価格



資料：東京都中央卸売市場(全場) 鮮魚/ぶり類/はまち(養殖)  
 (図中の数字は毎年1～11月の累計取扱数量を記載)

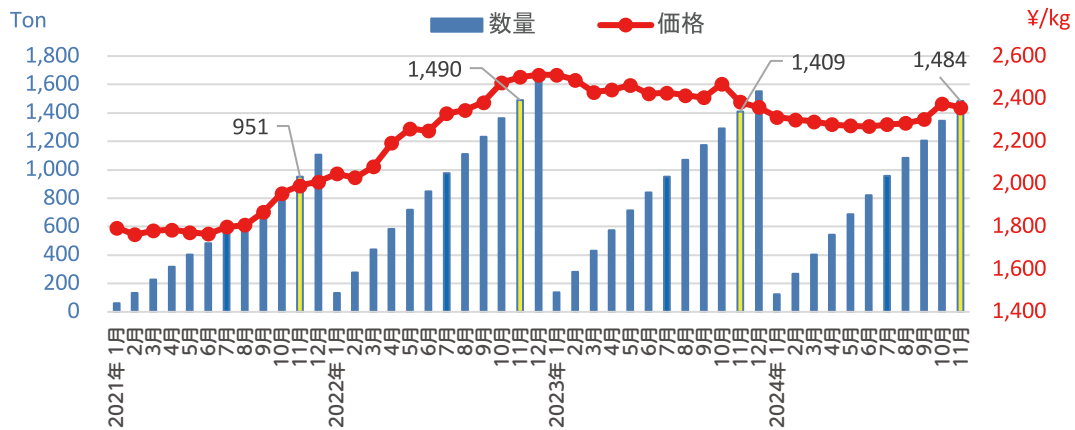


図8 冷凍ブリフィレ輸出数量と価格



資料：財務省 貿易統計 ぶりフィレ／冷凍（価格はFOB、図中の数字は毎年1～11月の累計輸出数量を記載）

図9 生鮮・冷蔵ブリフィレ輸出数量と価格



資料：財務省 貿易統計 ぶりフィレ／生鮮・冷蔵（価格はFOB、図中の数字は毎年1～11月の累計輸出数量を記載）

## 5. カンパチ

2024年1月のカンパチ浜相場は、鹿児島県で前年並みの1,450円/kgの相場高でスタートした。出荷適正サイズである3.5～4.0kgの品薄状況が続いたこともあり、6～7月から1,550円/kg、11～12月には1,600～1,650円/kgと上昇している。

また例年に比べ、水温上昇時期が早く、主要生産地の鹿児島県では8月には30℃を超える状況となった。高水温環境により、サイズが乗らず、出荷スケジュールが1か月以上遅れる事態となった。

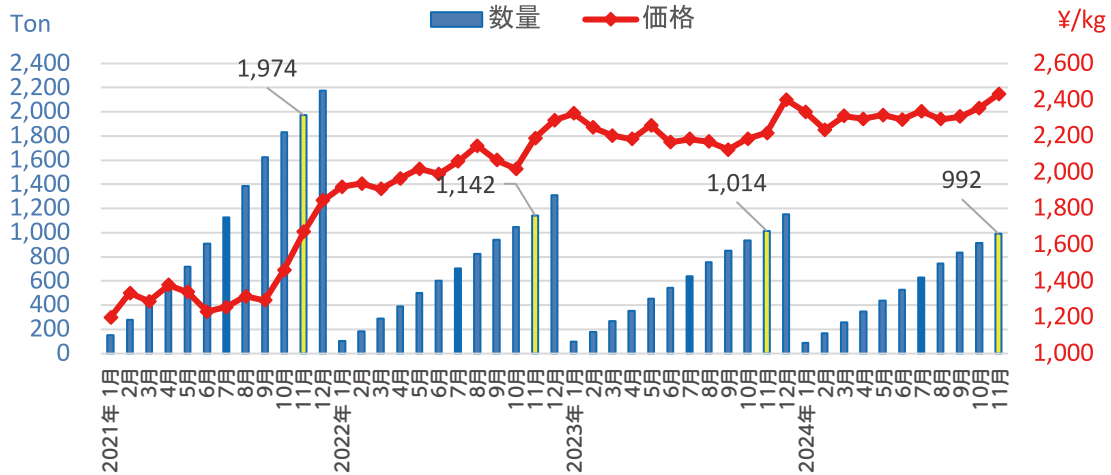
疾病については、鹿児島の錦江湾でノカルジア症やハダムシ症の発生が多く、例年に比べて大きな被害が出

た。

2024年の中国産カンパチ種苗は採捕時の魚体が例年よりも小さく海南島で飼育中にイリドウイルス症が発症し必要尾数の確保が困難になっている。そのため、2024年の導入数は前年より100万尾減少し約500万尾の模様である。このことから、カンパチの在池量は今後も少ない状況が続くことが想定される。

図10は、東京都中央卸売市場における2021年以降の養殖カンパチ（鮮魚）の累計取扱数量と月別価格を示したものである。2024年1～11月の取扱量は前年比2.2%減の992トで、平均価格は5.0%高の2,317円/kgであった。

図10 東京都中央卸売市場 カンパチ(養殖)取扱数量と価格



資料：東京都中央卸売市場(全场) 鮮魚/ぶり類/かんぱち(養殖) (図中の数字は毎年1~11月の累計取扱数量を記載)

## 6. ヒラマサ

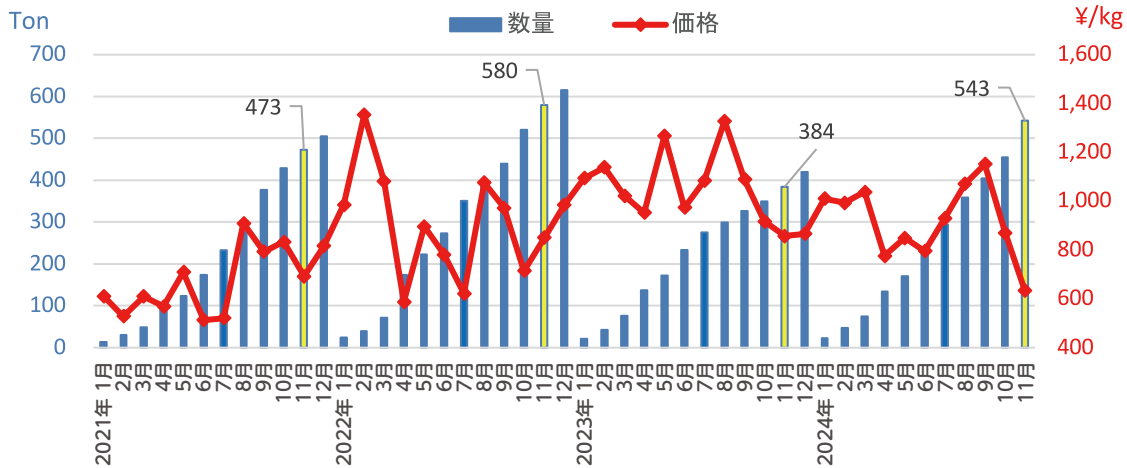
2024年のヒラマサ浜相場は、競合するカンパチの在池数量が少なかったため年間を通して堅調で1,200~1,300円/kgで推移したが、ブリの浜相場がヒラマサより約300円/kg安かったため引き合いはそれほど強くなかった。

ヒラマサ種苗の国内採捕は2021~2023年まで不漁が続いていたが、2024年は比較的順調で約25万尾であった。2024年のヒラマサ種苗導入尾数は海外採捕(中国)

の約60万尾と合わせて85万尾程度である。

図11は、東京都中央卸売市場における2021年以降のヒラマサ(鮮魚・天然と養殖)の累計取扱数量と月別価格を示したものである。2024年1~11月の取扱量は前年比41.4%増の543トで、平均価格は15.5%安の884円/kgであった。

図11 東京都中央卸売市場 ヒラマサ(鮮魚)取扱数量と価格



資料：東京都中央卸売市場(全场) 鮮魚/ぶり類/ひらまさ(天然・養殖の区別無し) (図中の数字は毎年1~11月の累計取扱数量を記載)

## 7. シマアジ

2024年のシマアジ浜相場は年初から堅調で、品薄状態が続いたことから上昇傾向が続き、12月末時点で1,900~2,200円/kgであった。2023年同様に魚病による斃死増や赤潮被害もあり在池量減少していることが、相場が堅調に推移している要因と考えられる。

魚病発生状況は、全国的に連鎖球菌症が発症してお

り、当歳魚についてはイリドウィスル病も発症している。2024年の連鎖球菌症は前年同様に、ワクチン接種後も抗体価が上昇しないことや持続性が低いため斃死が増加しており、代わりにマダイを導入する生産者もある。

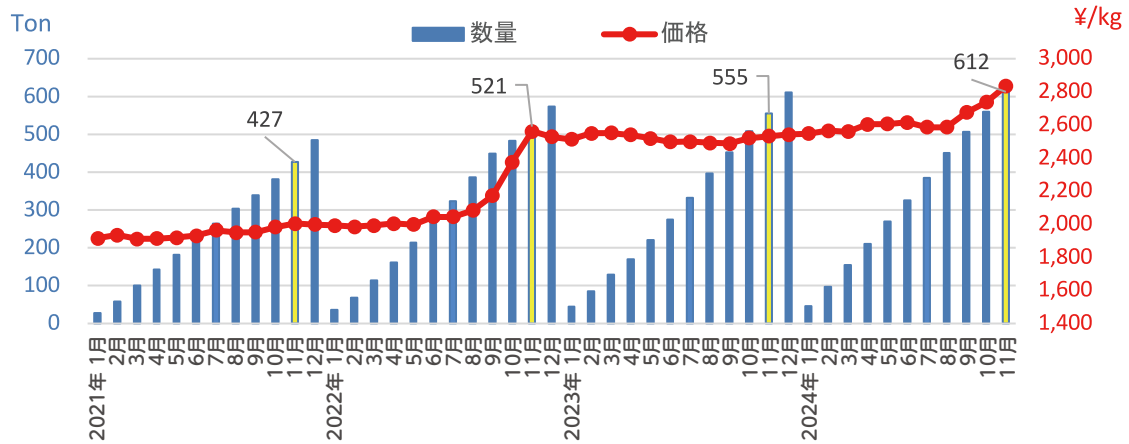
魚病の発症を抑える目的での給餌制限や、例年以上の高水温環境の影響で予定より成長が遅れ、出荷時期の

延期に繋がっている。

図12は、東京都中央卸売市場における2021年以降のシマアジ(活魚)の累計取扱数量と月別価格を示したも

のである。2024年1～11月の取扱量は前年比10.2%増612トで、平均価格は4.4%高2,629円/kgであった。

図12 東京都中央卸売市場 シマアジ(活魚)取扱数量と価格



資料：東京都中央卸売市場(全场) 活魚類/活しまあじ (図中の数字は毎年1～11月の累計取扱数量を記載)

## 8. アユ

2023年の全国の養殖アユ生産量は前年比7.6%減の3,387トで、上位3県は岐阜900ト、愛知833ト、和歌山599トであった(資料：農林水産省・内水面養殖業魚種別生産量)。

2024年はシーズン中盤までの人工種苗の生産・育成は過去2年と比較すれば全体的に順調であったが、記録的な猛暑の影響もあってか、地域によっては夏～秋の成長の悪さが気になる事例や、冷水病やビブリオ病といった問題になりやすい魚病とは異なる例年では出にくい魚病の発生事例も一部では確認された。

鮮魚相場は昨シーズンと同様に高値で推移し、8月の平均価格は豊洲市場で2,233円/kg(昨年2,341円/kg・過去5年平均1,617円/kg)、大阪本場市場で1,798円/kg(昨年1,840円/kg・過去5年平均1,217円/kg)となっていた。相場高の下で生産量を増加するため平均出荷サイズは大型化するのではと予想されたが、小売店の需要は1尾単価の安い小さめのサイズに移行し、大型サイズは売れにくくなっているとの声が聞かれた。生産者の種苗追加導入の意欲等は感じられたものの、要因は違えど結果として出荷サイズがやや小さめになった傾向は昨シーズンと同様で、ここ数年間減少の一途をたどっている養殖生産量の回復には至らなかったようである。

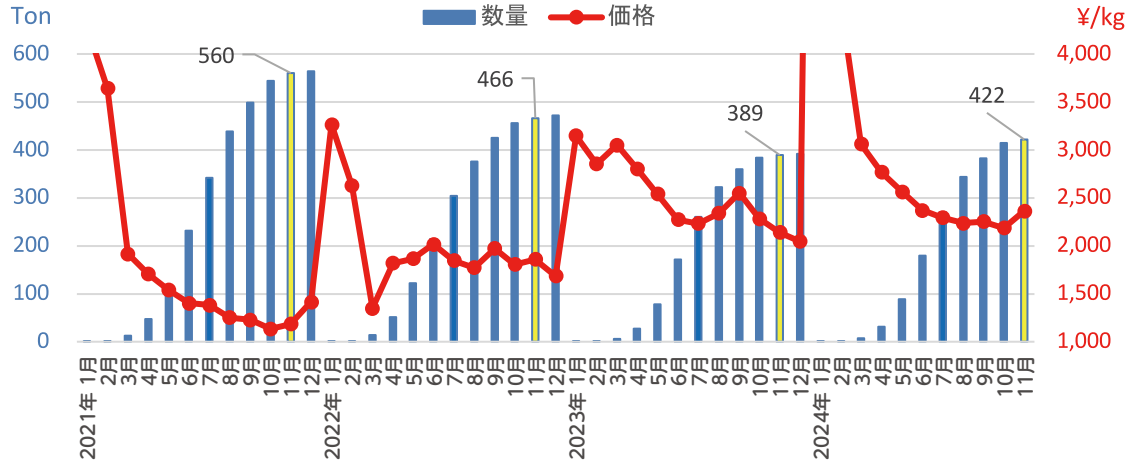
冷凍魚相場も品薄感が続き高値傾向となり、8月の平均

卸売価格は豊洲市場で2,383円/kg(昨年2,281円/kg・過去5年平均1,733円/kg)となっていた。このところ、冷凍魚の品質向上や扱いやすさが浸透してきたのか、小売店は鮮魚から冷凍魚に徐々にシフトしている傾向である。冷凍魚は鮮魚出荷に比べて夜間早朝の作業がなく、経営体規模の大小を問わず扱いやすく、経営のプラス要因になると思われる。一方、輸入量が増加している中国産冷凍アユの動向が気になるところである(12ページ 図14参照)。

新シーズンの種苗池入れは各地で開始されており、2024年12月の琵琶湖産種苗(河川放流や養殖用)の注文は昨年と同等の14トであった。琵琶湖資源水準については、滋賀県水産試験場による産卵調査結果では、有効産卵数32.6億粒で平年値71.3億粒の45%と猛暑の影響を受けたためか少なかった。また、2024年シーズン(2023年12月～)は琵琶湖のアユは記録的な不漁としてメディアにも取り上げられていたが、2025年シーズン開始となる2024年12月2日の解禁日も過去10年間で最低の漁獲量となった模様であり今後の展開が心配される。

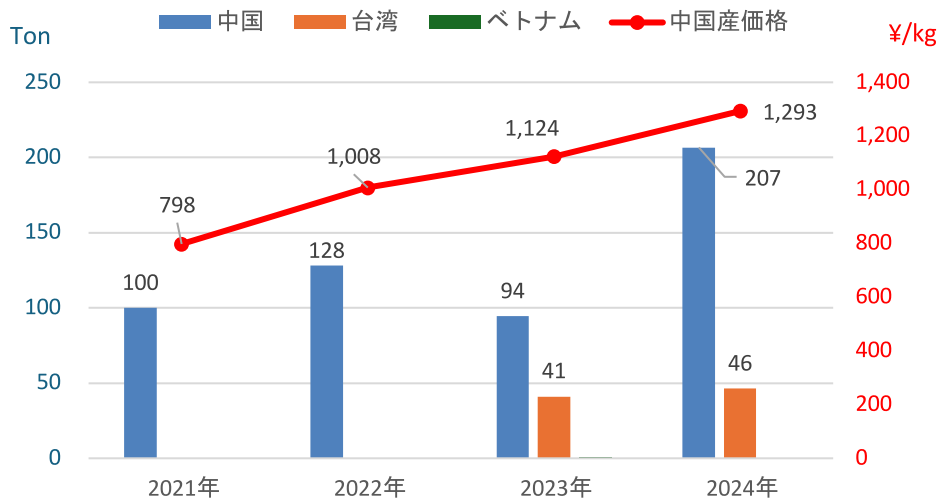
図13は、東京都中央卸売市場における2021年以降のアユ(生鮮)の累計取扱数量と月別価格を示したものである。2024年1～11月の取扱量は前年比8.4%増の422トで、平均価格は0.3%安の2,375円/kgであった。

図13 東京都中央卸売市場 アユ(鮮魚)取扱数量と価格



資料：東京都中央卸売市場(全場) 淡水魚/生鮮淡水魚類/あゆ (図中の数字は毎年1～11月の累計取扱数量を記載)

図14 冷凍アユの輸入数量と価格



資料：財務省 貿易統計 魚(冷凍したものに限る)/あゆ (価格はCIF、2024年は1～11月の累計数量と平均価格)

以上

注) 種苗価格・成魚浜相場及び輸出入価格は消費税抜き  
東京都中央卸売市場の平均価格・取扱金額は消費税込み

(文中社名等敬称略)

# アクアポニックス・陸上養殖設備展に出展して

太平洋貿易株式会社 第一営業部 係長  
奥出 英明

2024年7月24日～26日に東京ビッグサイトでアクアポニックス・陸上養殖設備展が開催された。この展示会は農業機器関連の施設園芸・植物工場展、スマートアグリジャパンとの共同開催であり、主催者の発表によれば、来場登録者数は3日間合計で16,261人であった。なお、出展企業は国外13社含む260社で、業界別では農業部門241社に対し、水産部門はわずか19社にとどまった。弊社を除く水産部門の出展企業は、同じくACN会員であるコフロック㈱をはじめ、水質計測機器やろ過装置などのメーカー、閉鎖循環養殖設備を開発・販売している企業などであった。

今回の出展目的は企業認知度向上、新規顧客獲得である。近年、異業種からサーモンやバナメイエビ、サバなどの陸上養殖に新規参入するという報道を目にする機会が増えている。実際、弊社にも多くの問合せをいただいている状況である。この展示会にも新規参入を検討している事業者が来場すると見込まれるため、これまで取引のない事業者向けに取扱商品をアピールする絶好の機会と捉え、初めて出展することとした。

弊社ブースでは配合飼料をはじめ、陸上養殖で使用されている自動給餌機、酸素ガス発生装置、水底掃除ロボットの実機や資料を展示し、併せて稚魚や水槽、ポンプなど資材について、会社案内を用いて紹介した。展示のメイン商材として酸素ガス発生装置を取り上げた。レンタルも可能な小型機器は実機を展示し、中型・大型機器については仕組みを動画で紹介するとともに、カタログをもとに説明を行った。

開催期間中、建設業をはじめインフラ、メーカー、行政など300名近くの方にブースに足を運んでいただいた。想定していた通り陸上養殖への新規参入を検討している事業者の方が多く来場された。既に養殖（試験養殖含む）を開始している事業者の方に養殖魚種について確認すると、やはりサーモンが人気で、ほかにはハタ類、甲殻類、チョウザメなどが聞かれた。ブースでは酸素ガス発生装置に次いで配合飼料に興味を持たれる方が多かった。一般海水魚向けやクルマエビ、ヒラメ、トラフグなど各魚種向けの製品について、サンプルを用いて案内した。



弊社ブース (少し寂しい)



コフロック㈱ブース

今回の展示会は農業部門が主であるため、普段関わることの少ない農業分野の方とも交流を持つことができた。農業分野では植物の光合成を促すために炭酸ガスを使用するが、養液栽培の養液の酸素濃度向上を目的として酸素ガスを使用することもあるなど、様々な情報を得ることができた。また、個々のブースでは成長促進に用いるLEDや各種計測機器など水産の現場でも目にする商材が並んでおり、共通点を見出すことができた。

アクアポニックスとは、水産と農業を結ぶものとして、魚と野菜を一つのシステムで育てるものである。展示会ではアクアポニックスに関するセミナーが2講演実施され、そのうち1講演を聴講した。会場は立ち見が出るほど盛況

であった。養殖されている魚種としてはチョウザメ、ティラピア、コイ、ニジマスなどが紹介された。このシステムでは、魚の飼育密度・微生物の定着状況・野菜の生産量などを管理することが重要であり、これらのバランスが崩れた場合には水質悪化や成長不良を招く結果となる。今回、アクアポニックスを実践している事業者の方と繋がりができたため、管理手法など現場で確認してみたい。

今回、第一営業部として初めて展示会に出展したこともあり、他社に比べブースが寂しい出来栄となった。それでもブースに訪問いただいた来場者には取扱商品を十分にアピールできたのではないかと考えている。新規案件も獲得でき、収穫の多い3日間となった。今後も拡大が見込まれるアクアポニックス・陸上養殖の動向に注目したい。



展示会場の様子

以上

# 第8回“日本の食品”輸出EXPO SUMMER に参加して

太平洋貿易株式会社 第二営業部 係長  
北澤 里沙

弊社の毎年の恒例となりつつある“日本の食品”輸出EXPOへの出展を2024年も行った。本展示会は海外の販路開拓を目指す企業の出展が主であり、農畜産物、水産物、飲料、調味料、加工食品などが展示されている。2024年6月19日(水)～6月21日(金)の期間に東京ビッグサイトで開催され、約2万人の来場者となった。これまで本展示会は年に1回のペースで開催されていたが、2024年から夏と冬の2回の開催となる。主催者であるRX Japan(株)によると、冬の時期にも開催することで、これまでタイミングが合わず来日することの出来なかった新規の海外バイヤーが来られるようになること、また、出展希望者も多い為、出展者の分散も目的として2回に分けての開催を行うとのことであった。また、これまでは主催者が海外VIPバイヤーの招致にも力を入れて取り組んでいたが、今回の展示会ではバイヤーの積極性を求める為に、招致していないとのことだった。基本的なコンセプトはこれまでと同様であり、椅子に座って落ち着いた商談を目的とし、事前アポイントシステムを活用して商談日時のセッティングが可能であった。バイヤーの招致を行わなかった影響もあってか、例年に比べると商談件数は少ない印象であった。



【弊社のブース全体の様子】



【弊社の水産品展示台】

主催者の新たな試みにより、来場者数、商談数は例年に比べると少ない印象ではあったものの、その分来場するバイヤーの真剣度は高いように感じた。弊社の出展商品は、メインアイテムである水産物（ブリ、真鯛、車海老、鰻、キャビア等）、酒類、和牛に加えて、健康食品の展示も行った。商品が偏ることなくバランスの良い引き合いがあり、事前のインターネット上の閲覧数では、健康食品への関心が高いようであった。

弊社は今回で6回目の出展であったが、毎年新しい試みを取り入れている。まず、ブースのデザインに関してだ。これまでは高級感を演出するために黒色を基調としたブース製作を行ってきたが、今回は敢えて白色をテーマとし、来場者が足を踏み入れやすいブース作りにこだわった。また、お酒の展示方法についても、遠くにいる来場者にもアピールしやすくした。実際にブースデザインに惹かれて立ち寄ってくれる来場者もいた。次に、環境を考えてサステナブルというテーマも起用し、カタログ等の枚数削減、デジタル化を試みた。このような展示会では、紙媒体の資料が多く、来場者が資料の保持に困ることも多いと思うが、そのような悩みを取り除く手助けになったと考えている。その他にも、車海老と鰻に関しては決まった試食タイムを設けて、積極的な試食提供に取り組

んだ。車海老や鰻は高級食材であり、安価な海外産バナメイエビや中国産などの鰻を選ぶバイヤーが多い。実際に試食を提供することで車海老や日本産鰻の良さを知って貰うことはできたと感じているが、今後もアピール方法について検討していきたい。

また、今回新たに展示を行った健康食品の一部を紹介したい。防災食品メーカーの東京ファインフーズ(株)より発売された世界初のヴィーガン防災パン『Vエイドパン』である。同商品にはクロレラ工業(株)の筑後産クロレラが使用されており、同社の水産飼料用クロレラを弊社が定期的に輸出している繋がりから、今回の展示会で紹介をさせて貰った。



## 【Vエイドパン】

〈特徴〉

- アレルゲン25品目FREE  
(小麦粉・ごま・アーモンドを除く)
- 無添加・食品添加物不使用
- 賞味期限：5年間

まだ日本では馴染みが薄いかもしれないが、世界にはヴィーガン(卵や乳製品を含む、動物性食品をいっさい口にしない「完全菜食主義者」)が一定数存在している。Vエイドパンはヴィーガン向けの商品であり、通常であればパンに使用されるはずの卵や、乳製品が使用されていない。また、賞味期限も5年と長く、非常食としての利用も可能である。ここまで聞くと、硬くて美味しくないパンを想像する方が多いのではないだろうか。この商品はそのような期待を良い意味で裏切ってくれて、味も様々な種類がある。クロレラを使用した他の商品としては「抹茶クロレラ&あずき」も販売されている。非常食としては勿論だが、平常時にも食べたい美味しさであり、海外向けに輸出できれば面白い商品だと感じている。今後も現在取り扱っている製品の枠にはまることなく面白い商材を探し、新たな提案を続けていきたいと思う。

以上